

# アドルフ・ロースの初期理論の形成要因に関する考察 - 『Ins Leere Gesprochen』を中心に -

1G06D172-1 細井 淳\*

アドルフ・ロース 『Ins Leere Gesprochen』 「装飾と犯罪」  
ルイス・サリヴァン アーツ・アンド・クラフツ ウィーン分離派

## 序論

本研究は19世紀末から20世紀初頭にかけて、オーストリア・ウィーンで活躍した建築家アドルフ・ロース(Adolf Loos, 1870-1933)の、「装飾と犯罪」(1908)<sup>1</sup>という論文における装飾否定の発言までを初期理論とし、そこに至るまでの足跡を辿り、装飾否定の発言に至る要因を考察した。ロースは、装飾の無い建築を訴えたとして、モダニズムの先駆者として扱われてきたが、実際には、装飾を完全に否定したのではなく、日常品から装飾を除くことを主張していたのである。そこには彼の実利の精神と古典主義が影響していた。<sup>2</sup>ただ、ロースの残した論文の多くが未邦訳であり日本には紹介されていない。そのため、発言の背景は不明確なままとなっている。ロースは、1896年にウィーンに移住し、建築家としての活動を始める前に、アメリカとイギリスに旅行している。彼はそのときの経験を、ウィーンに移住した後、美術工芸の批評家として日刊紙『ノイエ・フライエ・プレッセ』(Neue Freie Presse)などに寄稿した論文の中で多く語っている。本研究では、これらの論文をまとめて収録した、未邦訳の『虚空に吼える Ins Leere Gesprochen』<sup>3</sup>(以下、『虚空に吼える』、図1)を貴重な一次資料とし、ロースの思想と、当時各国で起こっていた美術工芸運動、建築家の思想とを比較、分析を行なった。そしてアメリカとイギリスでの経験が、彼にどのような影響を及ぼしたかを明らかにした。



図1 『虚空に吼える』  
出典: 『Fashioning Vienna』

## 本論第1章 初期理論に至るまでの足跡

ロースは、旅行前後で装飾に対する態度を大きく変えた。そのことは、『虚空に吼える』における言説の中で、アメリカ・イギリスの二国が度々登場することからも窺える。よって本章では、この二国を主に取り上げ、美術工芸運動や建築家の理論を研究し、ロースの初期理論につながる思想を明確にした。

### ■アメリカ/ルイス・サリヴァン

ロースが訪れたシカゴには、シカゴ派の建築が隆盛の兆しを見せていた。以下は、その筆頭であったルイス・サリヴァン(Louis Henry Sullivan, 1856-1924)の理論である。

#### ・「形態は機能に従う(form follows function)」<sup>4</sup>

サリヴァンは、自然界におけるものは、その機能や要求に対して最適形態を持つように法則づけられているとし、建築も、過去から伝わる格言を排除し、その法則に従わなければならないとした。

#### ・工学に対する意識

土地の有効利用が訴えられていたシカゴにおいて、サリヴァンは新しい工学的技術の必要性を感じ、「工学者だけが問題の本質を捉え得る」<sup>5</sup>と考えていた。そして、彼は、元土木技術者であったダンクマール・アドラー(Dankmar Adler, 1844-1900)を仕事上のパートナーとして選び、鉄骨ラーメン構造の普及を目指した。

### ■イギリス/アーツ・アンド・クラフツ

アメリカ滞在の後、1年に満たない期間ではあるが、ロースはイギリスに滞在している。イギリスでは、アーツ・アンド・クラフツ運動という美術工芸運動が起こっていた。ここではロースが『虚空に吼える』において、その名を挙げているジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)と、その理論を継いで運動を広めたウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)の理論を概括する。<sup>6</sup>

#### ・中世の手仕事への回帰

ラスキンやモリスは中世において、芸術表現が「労働における人間の喜びの表現」<sup>7</sup>であったとした。産業革命によってもたらされた、当時の機械生産ではそれが失われてしまうと、彼らは中世の手仕事に戻ることを提唱した。

#### ・芸術と工芸の統一

当時の製品に「正直」と「簡朴」が欠けていると感じたモリスは、画家、建築家、工芸家など多分野に渡る人々と、モリス商会という団体を立ち上げ、芸術と手工芸の格差をなくすことを目指した。

### ■ウィーン/ウィーン分離派とオットー・ヴァーグナー

ロースが『虚空に吼える』を執筆したウィーンでは、ウィーン分離派という美術工芸団体と建築家として名を馳せていたオットー・ヴァーグナー(Otto Wagner, 1841-1918)がいた。

#### ・ウィーン分離派の理念

「時代にはその芸術を、芸術にはその自由を」<sup>8</sup>という言葉掲げ、過去の様式にとらわれない芸術を目指した。また元々アーツ・アンド・クラフツから影響を受けており、同じように芸術と工芸の統一を志した。

#### ・オットー・ヴァーグナー

「われわれの芸術創造の唯一の出発点はまさに近代生活である」<sup>8</sup>とし、芸術と日常生活の不可分な関係性を主張した。また、新しい様式は存在する様式を改変することによって生み出されるという考え方を持っていた。

## 本論第2章 アドルフ・ロースの言説から見る思想

前章において示された思想に対して、ロースがどのように言及しているかを『虚空に吼える』から抽出、分析した。

### ■ウィーンに対する失望

ロースは、分離派やヴァーグナーが主張した、芸術と工芸を統一することを拒否した。それはロースが重要視する

「機能性」を阻害し、経済的な負担をもたらすからであった。またそれはウィーンのブルジョアジー（中産階級の人々）の成金主義と相まって、安価なもので高価なものを偽装する、「イミテーション」を生み出す原因となるからである。一方ヴァーグナーが主張した、過去の様式の改変によって新しい様式をつくり出す手法は、ロースにとっては単なるイミテーションの一種でしかなく、そのオリジナルの素晴らしさを奪い去ってしまうだけであった。ロースはこのイミテーションを禁じるとともに、これを肯定するウィーンの社会的モラルの低下を批判したのである。

### ■アングロサクソン文化への憧憬

ロースは、度々アメリカとイギリスを同一視したり、区別なく扱っている。それは、彼がこの2カ国に共通する視点を持っていたからだと推察し、比較分析を進めた。

#### ・サリヴァンとの比較

形態と機能の関係性において、ロースはサリヴァンと同調する。ロースは「『美しさ』の称号を主張しようとするあらゆるものに最も基本的に要求されるのは、それが機能性の領域を犯さないということである。」<sup>10</sup>と述べ、機能性を犯さないことが必要であるとした。アメリカで遭遇した実利主義的思想の影響が、ここには見られる。しかし、サリヴァンが重要視していた工学分野に関しては、ロースは積極的な姿勢は見せていない。しかし、サリヴァンが「工学者だけが問題の本質を捉え得る」と考え、工学の専門家をパートナーとして選び、シカゴ建築の発展を目指したように、ロースもその専門性に重要性を見出していたのだった。ロースは、建築の構造を被覆する際のイミテーションの話を持ち出して、再度虚偽の精神を批判し、さらに職人が専門外の分野に手を出すことを禁じたのである。つまり、ロースは専門性を重視することによって、質の高い製品を生み出すことを主張していたと考えられる。

#### ・アーツ・アンド・クラフツとの比較

ロースは、「手仕事の方がなにか劣っているといった観念を長い時間をかけてコツコツと覆していったのは、なによりもイギリス人であった。」<sup>11</sup>とし、アーツ・アンド・クラフツの手仕事の重要性を評価している。さらに手仕事における喜びを認め、ラスキンやモリスに見られる、中世の職人技術を賞賛する古典主義的思想も窺わせている。また、ウィーン分離派にも見られた、芸術と工芸の統一については、反対の意見を持っていたロースだが、アーツ・アンド・クラフツ運動においてモリスが求めていた日常品の「正直」と「簡朴」は、ロースによって「正しい形態、堅実なマテリアル、そして正確な製作」<sup>12</sup>と解釈されていたのだ。モリスは知識や技術を最大限生かすために、その

製作過程で一切の妥協を許さなかった。ロースはそれを、材料に関する知識を生かし、それに実直な加工をすることで「正しい形態」を得ることができると解釈したのだ。だからこそ、既に高い技術を持つウィーンの職人に、材料に関する正確な知識を持つことを訴えたのである。

### ■装飾に対する姿勢

ロースの言説から推察されたアメリカとイギリスの共通項は、知識やそれに伴う専門性という点にある。ロースは正しい知識を学び、それに従順な製作をすることを主張した。そして、社会がより専門化していくことを訴えた。それは、サリヴァンの専門性への意識や、モリスの主張した「正直」と「簡朴」に通じていた。そうした専門性の高い仕事は、職人の自身に対する誇りや職人氣質を蘇らせ、虚飾（イミテーション）や過剰な装飾を根絶し、ウィーンに社会的モラルを取り戻すことにつながると考えていたのである。また、ロースはアーツ・アンド・クラフツに通ずる古典主義的立場も持ち合わせ、過去に生まれた装飾は否定しなかった。そして、機能性やアメリカ的な実利の面からも過剰な装飾を禁じたのである。つまり知識・専門性、実利の精神、古典主義の3点が彼の装飾に対する姿勢の大きな構成要素であったと考えられるのである。（表1）

### 本論第3章 論文「装飾と犯罪」における装飾否定

『虚空に吼える』を含めた言説の分析を通して、その根底には知識と専門性に対する意識が大きく関係していることが分かった。ロースは、知的レベルの低いパプア人が装飾をすることは咎めない。むしろ、多くの知識を得た近代人が、自身の専門性を逸脱したイミテーションをすることを断罪したのだ。そして、装飾を日用品から排除し、過去に存在するものを正確にコピーすることで、手にした時間や労力を専門的な質を高めることに転用できると考えたのであった。つまりこの論文での発言は、知識に実直な専門性によって、長期にわたり使用される質の高い製品を生む必要性を意味していたのである。

### 結論

以上により、ロースがウィーンとの対比の中で賞賛したアメリカ・イギリスから見た、ロースの初期理論の形成過程を明らかにした。彼の中で、知識と専門性が重要な要素として存在しており、それが彼の装飾に対する姿勢を形成する要因にもなっていた。そして、その理論はウィーンで活動したロースだからこそ導き出せたものであった。専門分野の必要性を訴えたロースは、やはり近代建築に一石を投じていたと考えられるのである。

### 謝辞

本研究を書くにあたって、『虚空に吼える』邦訳文を提供して頂いた菊池利之氏に厚く御礼申し上げます。

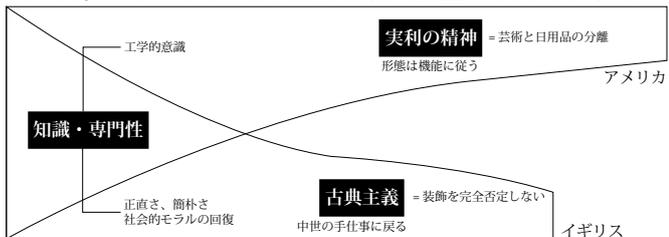


表1 ロースの初期理論（筆者作成）

<sup>1</sup> 初出不明だが、1908年の講演に基づいて執筆されたもの。<sup>2</sup> ロースの古典主義的側面は、磯野英生(1986)らによって、既に指摘されている。また実利の精神については、伊藤哲夫(1980)に詳しい。<sup>3</sup> Adolf Loos(1921), Georges Crés et Cie, <sup>4</sup> Louis Sullivan(1896) 『Kindergarten Chats and Other Writings』 Dover Publications, <sup>5</sup> ルイス・H・サリヴァン(1977) 『サリヴァン自伝 若き建築家の肖像』 竹内大・藤田延幸訳、鹿島出版会。 <sup>6</sup> ニコラス・ペヴスナー(1976) 『モダン・デザインの源流 モリス/アール・ヌーヴォー/20世紀』 小野二郎訳、美術出版社。 <sup>7</sup> ジョン・ラスキン(2006) 『ヴェネツィアの石—建築・装飾とゴシック精神』 内藤史朗訳、法蔵館。 <sup>8</sup> ハインリヒ・クルカ(1984) 『アドルフ・ロース』 岩下直好・佐藤康則訳、泰流社。 <sup>9</sup> オットー・ヴァーグナー(1985) 『近代建築』 樋口清・佐久間博訳、中央公論美術出版。 <sup>10</sup> 『椅子』(以下、特記なき場合『Ins Leere Gesprochen』所収) <sup>11</sup> 建築における新・旧の二つの方向—最近のウィーンの芸術思潮を十分考慮した上での比較検討、『装飾と犯罪』所収。 <sup>12</sup> 『ジルバーホフとその界隈』